



## □空間に関する所感

寸法は2000×1220×2070mmの

小さく、

そして巨大な部屋。

「空間」を「機能」という人間の

行為からの「必要性」とは違う観点から考える。

断片化によりこの小さな部屋は物性を獲得する。

配置ではなく陳列に、

構成ではなく包囲へ。

このモノは、「存在」することによって、意味と装飾性を帯びていく。

イタリアや京都で体験した「数寄」に満ちた空間を参照し決して説明的ではなく、

快樂的な空間を志向する。

建築面積2.44㎡のこの巨大な空間で、建築が単なる機械ではなく人間の内面に踏み

込みその精神を左右するものである事を証明する。

そこで私は、

この「囲われる空間」を

『檻』と呼ぶ。

大声で言う

今、檻が必要なのだ。

## □目的

私たちが、「つくりたい」という「空間」とは、

一体何か。

空間とは、物体として存在するものではない、

ただそこにあるもの。

スケッチ、図面、模型、CG、どれも建築を作るために用いる手段だ。

そして、その場合の建築でさえも「つくりたい空間」のために用いる、手段だ。

目的は、別のところにある。

少なくとも、私はそう思う。

私が今回設計した空間には、基本的には敷地も、機能も何もない。

強いて言えば、「ヒトがいるための場所」

その夢を叶えるために、壁も、屋根も存在する。

空間をはかる尺度はなにか、

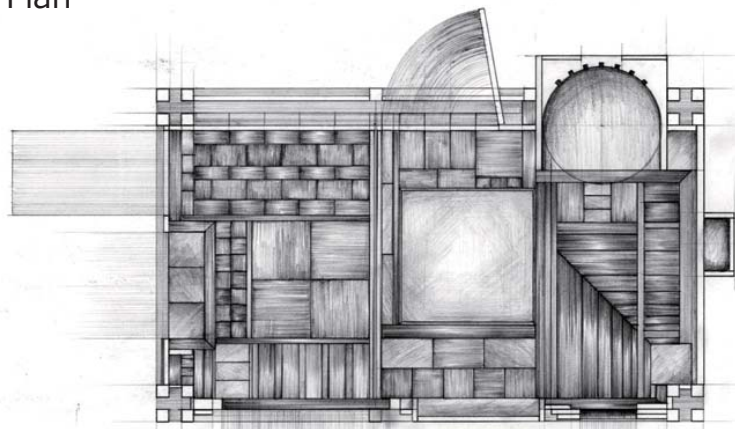
その手がかりを探るために、今回私は問うことにした。

「自分はそこに居れるか」と。

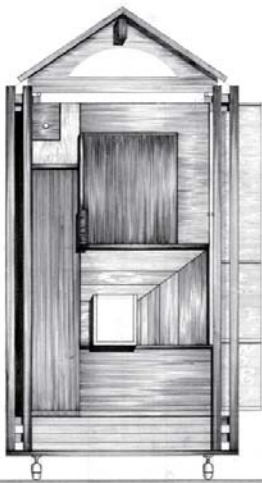




Plan



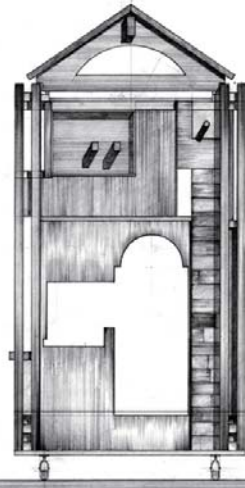
Elevation/Interior Elevation



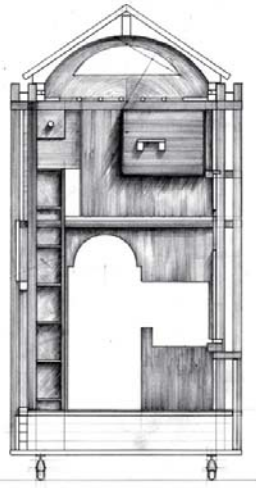
ELEVATION



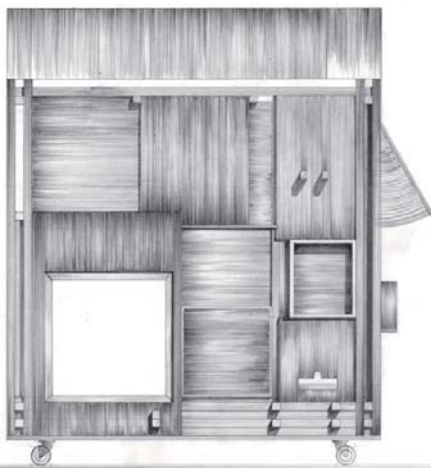
INTERIOR ELEVATION



ELEVATION

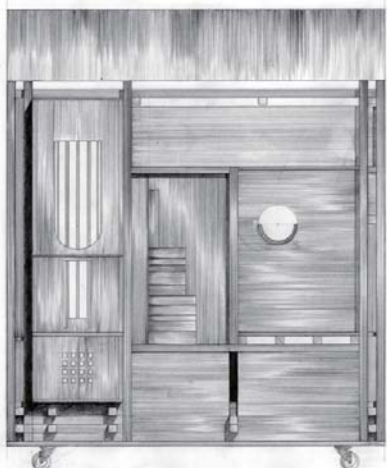
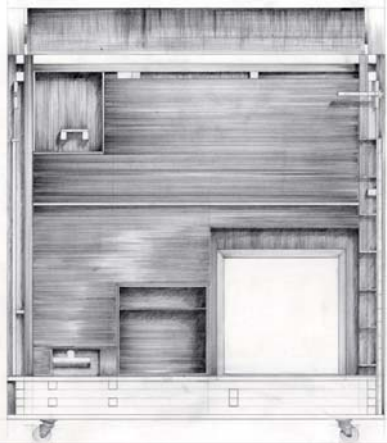


INTERIOR ELEVATION



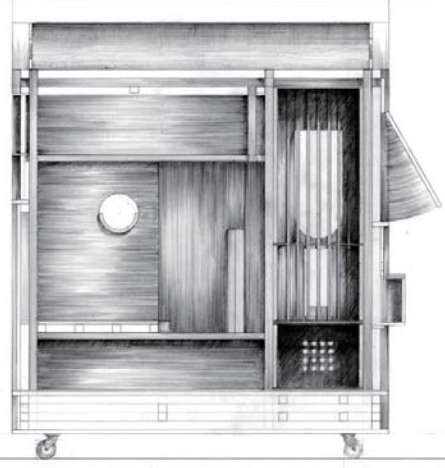
ELEVATION

INTERIOR ELEVATION



ELEVATION

INTERIOR ELEVATION



フライング・スパイン⇒



ヴォールト⇒



ハットツリー・ホール⇒



テーブル・キャッチ⇒



オキュラス⇒



赤道⇒



ピープ・ホール⇒



テーブル・キャッチ⇒



レターホール⇒



ファイアー・シェルフ⇒





## □檻として-Ori-

この空間は、体験者にとって「檻」として、ヒトの内面に存在することを考えている。  
ヒトが閉じている時、欲望を押しさえ込む「籠もるための檻」として  
開いている時は、友人達を招き「もてなすための檻」として  
この檻から外に出ているときは、「帰るための檻」として。  
空間が存在することによって、人間の存在自体を認識的に肯定するための、空間である。  
それは、言い換えると「寛大な空間」である。  
今回、私はその寛大な空間のための手段として「檻」を設計した。  
その寛大な空間がいつか、人間の存在理由にまで昇華する日を夢見て、  
私はクワンと格闘し続ける。

